

市民のための歴史、理系のための歴史

- 歴史教育の再生をめざして -

桃木至朗（大阪大学文学研究科）

momoki@let.osaka-u.ac.jp

I 歴史学と歴史教育の現在

1. 高度な発展

過去の歴史などわかることはすでに全部わかってしまっている、と思っている人も多いが、グローバル化とIT化のなかで急速に発展しているのは理系の学問だけではない。今まで行かれなかった外国に簡単に調査に行ける、大量の史料がパソコンとインターネットで容易に検索できる、そういう状態になってはじめて解明でき、教えられることがらは、歴史にもたくさんあるのだ。

また、世界の変動に対応した新しい視点や領域の出現も大きい。東南アジア、アフリカやオセアニアの歴史、海から見た歴史、女性から見た歴史、環境と災害、病気の歴史、衣食住の歴史など、以前は軽視されていた分野の発展がいちじるしい。

それらの動きは世界共通だが、なかでも日本の歴史研究は、きめ細かさで世界の全域について専門家を擁する点で世界一と断言してさしつかえない。日本の歴史教育が全世界の歴史を教えようとする点も大きな特徴である。

2. しかし制度疲労と深刻な危機（歴史だけに限ったことではないが）

しかしその一方で、「暗記ばかり」で「現代社会の役に立たない」歴史学習の拒否と、アメリカ型の非歴史主義的思考の一般化、極端な政治的歴史観の流行、社会・論壇における「歴史家」の発言力と、「大河ドラマ」「時代劇」的共通知識の消失など、歴史学と歴史教育の深刻な危機が社会をおおっている。その原因はどこにあるだろうか。

（1）歴史をとらえる枠組みの問題

最近まで歴史は、明治以来の、「脱亜入欧」に必要な成人男性の教養という枠組みに、第二次大戦後の観念的な進歩主義・平和主義の枠組み（ヨーロッパモデルによる近代化をもっと徹底しようという思想）を接ぎ木したかたちで考察され、教えられてきた。そのどちらにおいてもアジアは視野の外にあった。

（2）学ぶべき歴史のイメージ

第一に各国家・民族がセパレートコースで競争し、「進んだ」「遅れた」の差ができる歴史、第二に（とくに文化史で顕著だが）各時代の最先端、最高峰、メジャーなものだけの歴史が教えられてきた。それは歴史を学ぶ子どもたちに対しても、「競争に勝って一流になれば、そうならない者には価値がない」というメッセージを発し続けてきたのではないだろうか。

（3）日本社会の欠点

細かいところばかりこだわって全体を見ないこと（だから重要な問題をランダムに並べた「入門書」は作れても、「歴史学の方法や現状を主要下位領域に区分して解説し、通読すれば歴史学の全体像がわかるようにした教科書」が作れない）横並びの発想が強く、みんなとちがったことができないし、みんながやっていることはやめられないこと、自分の属する集団の外部に向けて自分の知識や考えを説明したり、外部の人間と討論する能力がきわめて低いこと（これは「日本語は論理的でないが自然の描写や感情表現に優れる」などという19世紀的理解を引きずった国語教育の深刻な欠陥が根本原因）などの、日本社会全般の欠点も歴史学と歴史教育の危機に影響している。

（4）大学・高校の保守性と学習指導要領の失敗

「暗記ばかりの入試が変わらない」「教科書は訳がわからなくなる一方」という現状の背後にある大学（とくに人文系）・高校の保守性と研究者・教員の視野の狭さは度しがたい。歴史学と教育学（地歴科教育法）の間のカベも問題で

ある（前者は「専門性」から出られず、後者は歴史教育の抽象的目的と具体的な（個々の）授業実践の方法に終始）。

そして、学問の進歩と世界の動きから見れば評価すべき現行学習指導要領と教科書の新しい内容が、こうした教育現場や学界への十分な解説などの条件整備を欠いたために、現場ではうまく教えられないどころか拒否されている。だからといって内容を「元に戻す」ことが自殺行為だとすれば、一体どうすべきかを真剣に討論する必要がある。

（５）阪大史学の挑戦

この事態に対して、研究者や教員を養成する阪大の史学系では、つぎつぎと斬新な取り組みをおこなってきた。まず研究面では、シルクロード史（中央ユーラシア史）、東南アジア・海域アジア史、近現代のグローバルヒストリー（国ごとの歴史の寄せ集めでない世界史の全体像を研究する）など世界を広く見渡す歴史研究と、日本国家の成立（考古学）や日本中世史の定説に対する関西の視点を活かした書き換え、フィールドワークを重視する中国史など、現場感覚に根ざした歴史研究を「売り」にしてきた。

一方教育面では、「大阪大学歴史教育研究会」などを通じた、歴史教育刷新の取り組みが広がりつつある。これは高校教育への働きかけだけでなく、大学の教養課程・専門課程、さらに大学院の授業改革まで進めている。その目標は世界レベルで活躍できる研究者・社会人の育成、良い教科書が書け入試問題が作れ教員養成ができる大学教員の養成などにあり、方法として(a)目的を明確にした積み上げ式のカリキュラム（語学と外国語史料読解、個々のテーマの研究、発表と討論 etc）と、(b)きめ細かい履修指導による「再チャレンジ」「飛び越し」「はみ出し」などの奨励などに重点をおく。

これらが当たり前前の学問分野もあるだろうが、日本の歴史学においては断然先頭を行く。

II わかる歴史、面白い歴史、役に立つ歴史

上のような大阪大学の活動のスローガンの一つに、「わかる歴史、面白い歴史、役に立つ歴史（または必要な歴史）」というのがある。中学や高校で必修科目として全員に強制的に履修させるような科目は、この三拍子が揃わねばいけぬ。だがそもそも歴史とはどんな学問・科目なのか、そしてどんな意義をもつのだろうか。

1. 歴史とは？

（１）暗記科目か？

たしかに歴史を学ぶには一定の暗記が必要だが、パターンや傾向を読みとりそれに基づいて推論することも必要な点で、語学と似ている（化学や生物とも？）。したがって単なる暗記事項の羅列でなく構造とストーリーをもった「わかる」歴史が可能になる。それに関する試験も、たとえば今年度開講した、高校世界史の知識を前提としない教養科目で出題した下記の問題のようなものが本来の姿である。

2007年1学期「市民のためのアジア史」小テスト例

モンゴル帝国と現代アメリカ合衆国の共通点を説明せよ。

辛亥革命後の中国は領土、民族などの点でどんな国家になるべきだったか、当時の状況をふまえて、孫文になったつもりで考えよ。

（２）科学か？

歴史に限らず文系科目に対する理系人間の不信感はいくらだろう。たしかに歴史も「実験で再現できる法則がある」という条件は満たさない。しかし恣意的な解釈ゲームだけをしているわけではなく、立論の根拠を確認できるように明示しておく、一定の約束に従って用語や概念を使用するなどの点で、「学問」ではある。唯一絶対の正解を求めるのではなく、複数の方法を適宜使い分けて事態の改善をはかる点では、臨床医学や臨床心理学と似た面もあるはずだ。理系人間はこういう学問を通じて、世の中がすべて科学で動いてはいないことを認識する必要がある。

2. 歴史教育は何の役に立つか？

次に、歴史を学ぶことはなんの役に立つのだろうか。

(1) 一般的効用

たとえば以下のような一般的効用がしばしば挙げられる。

- ・現在の社会は歴史の積み重ねの上に成り立ったものだから、歴史(とくに近現代史)を学ぶことで、現在を理解し未来を展望する力が身に付く。[歴史の変化する面がこれを要求する]
- ・過去の人類のさまざまな成功や失敗の教訓に学ぶことで、よりよい生き方、よりよい社会が可能になる。[歴史の変わらぬ面、繰り返す面がこれを要求する]
- ・「過去という他者」(外国史なら二重の意味で他者)を学ぶことで、他者理解や異文化コミュニケーションの能力が鍛えられる。
- ・複数の資料を批判的に読んで事実を確定する訓練は、情報リテラシーの涵養につながる。
- ・「時代」や「社会」などを研究することで、「長い目で見る」訓練、巨視的な視野が身に付く。
- ・「事実は小説より奇なり」の言葉通り、文学に劣らず良質な娯楽や知的興奮の材料となる。

(2) 歴史を知らないと(考えないと)どんな失敗をするか?

逆に、歴史を学ばないと以下のようにいろいろ失敗する、という言い方も出来る。

- ・近年の「教育改革」のように、旧日本陸軍と同じやり方でデタラメな「戦争」をする：最高指導部が大局的な戦略をもたないし無責任、不十分な予算・補給で現場に突撃ばかり命じる。文句を言うと敢闘精神と工夫が足りないといふ非難する。現場は優秀だがワンパターン金太郎飴的な戦いしかできない。
- ・現在の(たまたまそうなっている)状況や仕組み、価値観などをずっと変わらないものと思いついて、繁栄の裏に忍び寄る危機を見逃したり、逆に問題点を改革するチャンスを見送ることがある。[巨人中心の野球報道から学界や学問の仕組みまで]
- ・現在の「先端技術を使いこなせる先進国の健常者」が当たり前だと思いついて、その基準通り動けない発展途上国の人々やハンディキャップのある人々が理解できず、そういう人々を蔑視したり、無理を強いたりすることがよくある。[ODAからNGOまで]
- ・悪意はなくても、外国人やよその地方の出身者とのつき合いがうまくいかない場合がある。[第二次世界大戦や植民地支配の話だけではない]
- ・発展途上国でのカネがからんだ仕事で、ふっかけられて大損したり、善意でカネを払って現地社会に亀裂を生むことがきわめて多い。[貨幣経済が最近侵入するまでは、ずっと昔から自給自足で素朴に(地縁血縁に縛られて)生きてきた素朴な村人たち、などという非歴史的な虚像を信じてはいけない]

3. 自然と科学技術に関連する「面白い歴史」

歴史の面白さは文系専用ではない。現在の歴史学は自然や科学技術に関わるさまざまな問題を研究し、その一部はすでに高校教育にも取り入れられている。(4)のように、歴史を理解することは論理的思考の訓練にもつながる。(5)は昔、東南アジア研究所(京大)で受けた教育にもとづいて私が書いた、高校教科書の東南アジアの生態と農業に関する記述を理解するために、必要な観点として高校の先生にたびたび説明している例題である(大学の授業でも(4)(5)はよく話す)。

(1) 自然と環境

- ・地形・地質、気候、水文、動植物、天然資源、天災、伝染病...

(2) 科学と技術

- ・農林水産業、牧畜(遊牧)、手工業、暦法、軍事・武器技術、医療、自然観と人間観...

(3) 暮らしと生死

- ・衣食住、世代サイクルと人生サイクル、誕生と死、人口...

(4) 論理的な考え方

- ・人間の技術や智慧は昔に戻るほど単純で低レベル?
- ・個人の自由は昔に戻るほど小さかった?
- ・昔はどの家も子たくさんだった?
- ・国や組織が減びるのはすべて力が衰えたため?
- ・社会のあり方や人の行動を決めるのは単一の要素(例: 国家、宗教、経済、技術)か?

(5) 東南アジアの歴史から

- ・「年に2回(3回、4回)コメが穫れる」という記録がよく見られるが、これは2期作(3期作、4期作)が古代から普及していたという意味か?
- ・熱帯雨林は肥沃な農業地帯か? 東南アジアの土壌は肥沃か?
- ・20世紀にコメ輸出世界一を争うメコン・デルタとチャオプラヤ・デルタは、古くから穀倉地帯だったのだろうか?
- ・コメを大量に輸出する穀倉地帯イコール集約農業地帯と言えるか?

4. 本日の課題

問題 もし江戸幕府が鎖国しなかったら、日本はようになっていただろうか。その点から見て、鎖国にはどんな得失があっただろうか。「どの国も本来はヨーロッパ諸国と同じように発展するはずだ」という観念論でなく、17~18世紀アジアと世界の現実から考えよ。

最後に皆さんも比較的良好にご存じの日本の鎖国について、技術や環境の問題も含めて考えていただこう。これが「面白い」と感じていただければ、歴史を学ぶことは万人に面白く有意義だと間違いなくいえるだろう。それには、16~17世紀のいわゆる大航海時代の、日本を含む東アジア・東南アジアの状況を見ておく必要がある。

(1) 16~17世紀(大航海時代)の東アジア・東南アジア

この時代のヨーロッパ人の活動から「世界の一体化」が始まる。世界経済の中心だったアジアは、日本銀(中国から伝わった、鉛と銀の融点の差を利用して純粋な銀を取り出す「灰吹き法」で大量生産に成功した石見銀山)とアメリカ大陸産銀(水銀アマルガム法で大量生産をした「メキシコ銀」)の大規模な流動に支えられた空前の好景気を迎える。当時の東アジア最大の貿易は日本銀と中国生糸の取引。ただし倭寇問題などがあり、かつてのいわゆる勘合貿易の時代に結ばれていた日中の国交は断絶したままだった。

しかし17世紀中後半には世界的な経済・社会危機が訪れる。銀の過剰流動による通貨混乱と、過剰開発による森林破壊などの環境危機が主な原因であった。ヨーロッパ史では以前から言われていた「17世紀の危機」である。

なおヨーロッパではすでに科学革命が始まっているが、ヨーロッパの社会・文化はまだ「近代的」でも「アジアより先進的」でもなかったことは、あまり理解されていない。

(2) 日本の鎖国の実態

次に、最近まで間違った教えられ方をしていた日本の鎖国の実態にもふれておきたい。第一に、1641年の鎖国完成後も、長崎だけが貿易や外交の窓口だったわけではないではない。薩摩~琉球~中国ルート、対馬~朝鮮ルート、蝦夷地~北方ルートと合わせ「4つの口」があった。

また、長崎貿易の相手はだれだったか? オランダ人(貿易高の1/3)というのはオランダ東インド会社(本拠地はインドネシアのバタヴィア)の各拠点との貿易を指す。基本的にオランダ東インド会社というのはアジア域内で貿易をしてその利益をヨーロッパに送ることを業務とした会社だから、オランダ人による長崎貿易のうち、ヨーロッパとの

貿易はごく一部にすぎなかった。

国交がないどころか中国は1644年の明朝滅亡前後、半世紀にわたって動乱に引き裂かれる。では長崎の中国人（貿易高の2/3）はどこから来たのか。鎖国当初にはそれは、鄭氏などの海賊集団と東南アジア華僑だった。ようやく中国が統一された1683年以降は、清朝が日本銅や海産物購入のために許可した特定の商人集団と東南アジア華僑が来航した。つまり、長崎貿易の大半はアジア貿易だった。

（3）鎖国の意図

それでは鎖国はなにを意図したものだったか。直接の意図は、一般に知られている通り、キリスト教の布教やキリスト教国の侵略、キリスト教国同士の戦争に巻き込まれること、キリスト教国と結んだ西国の大名の反乱などの事態を防ぐことにあった。

これに加えて最近注目されているのが、幕府による貿易の独占、通貨の統一管理などである。なお当時は「国を閉ざす」とは考えていない。あくまで現実の情勢に対応した管理強化措置であった。

（4）「鎖国」の実体化

ところが17世紀後半から銀資源が枯渇、幕府は輸出品を銅や海産物に切り替えて、生糸・絹織物などの輸入を維持しようとするが、しだいに貿易規模が縮小してゆく（18世紀には人口比で最盛期の1/10程度）。そして18世紀後半から「開国」を求めるヨーロッパ諸国に対し、幕府は「鎖国は先祖代々の決まりである」として拒否する。ようやく開国したのは、言うまでもなく1850年代のことだった。

（5）もし鎖国していなかったら？

いよいよ本題である。誤解している人も多いが、歴史にはたいてい複数の可能性がある。たとえば、当時の日本は優秀な鉄砲の技術と武士という戦争のプロフェッショナルをもつ、世界有数の軍事大国だった。したがって鎖国しなければ、200年早い「大日本帝国」が実現した可能性もある。

しかし逆に、インド洋や東南アジア群島部諸国のように、「17世紀の危機」の打撃を受けて混乱し、キリスト教国の植民地になった可能性の方が大きい。そしてそのとき、経済面で実験を握ったのは間違いなく、すでに日本の港町という港町にチャイナタウンを作っていた華僑のネットワークである。つまり鎖国により日本は、世界的通貨危機の直撃を免れ、華僑ネットワークの進出も食い止めた！そして、もとの人口が少なかったため本格的な環境の限界は18世紀まで来ない。しかも18世紀の日本は、17世紀に平和回復の結果2.5倍に増えた人口を、100年以上横ばいに抑えるという近代以前には稀な状況を創り出しつつ、いったんひどく痛めつけられた里山の回復など環境保護面でかなりの成果をあげる。武士の軍事力の形骸化つまり軍縮も、鎖国によって対外戦争が考えられなくなったからできたことで、ヨーロッパの近代化が戦争と軍拡の産物であるのとは対照的である。

（6）鎖国のもとで実現したこと

鎖国は、危機を未然に防いだだけでなく、多くのことを新たに実現した。第一に華僑ネットワークに牛耳られない独自の市場経済。その中心は大阪にあった。第二は貿易縮小を可能にした輸入代替工業化（生糸、砂糖など）。そして第三に、全国的に均質度の高い文化と国民意識である。これらこそが、幕末以降の急速な近代化の基盤をなした。ただその陰で、琉球（砂糖生産）蝦夷地（漁業や狩猟）が「植民地化」していたことを忘れてはならないが。

（7）鎖国の負の側面

琉球や蝦夷地の問題に限らず、鎖国には負の側面もあった。たとえば、バイリンガルやトリリンガルが珍しくなかった鎖国前に比べ、現実的国際感覚が後退したことは否定しようがない。それが国民意識の独善的な部分（神国思想など）につながる。そしてなにより、日本人は語学力を失った。これは今日まで強烈な後遺症を残している。

（8）17世紀の危機への対応が決めた世界各地の近代史

最後に、鎖国後の日本の歴史を世界のいろいろな地域と比べてみよう。すると、17世紀の危機への対応が、その後

20 世紀までの各地域の命運をほとんど決定していることがわかるだろう。

ヨーロッパは、植民地拡大で「前向きに」危機を乗り越り工業化・近代化に成功して全世界を支配する力を身につけてゆく（ただしこれは世界中の環境負荷を強めていく道だった）。インド洋、東南アジア地域などは、危機から立ち直れず徐々に植民地化してゆく。中国は伝統的構造を変えずに立ち直り、人口増加と華僑ネットワークの膨張が本格化する。最後に日本は、鎖国のもとで独自の近代化の基盤を形成した。欧米と日本だけが先進国なのではない状況の出現、中国すら含めた少子高齢化など、現在起こっている事態は、300 年続いた構図が崩れつつあるという、大変な変化だと思われる。